体系的な記述研究から比較研究、そして言語系統樹の研究へ

琉球大学提供
作成日　2016年 3月 31日
更新日

研究者氏名	所属機関	関連キーワード（複数可）
かりまた　しげひさ 狩俣　繁久	琉球大学法文学部	○琉球諸語、消滅危機言語、継承言語学

主な研究テーマ
・琉球諸語の記述研究
・琉球諸語の記録保存と継承のための研究
・琉球諸語の比較歴史言語学的研究

主な採択課題
・基盤研究(A)平成24～27年度（配分総額：49,270千円）
「消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語の文法記述に関する基礎的研究」
・基盤研究(B)平成20～22年度（配分総額：9,880千円）
「南琉球方言の文法の基礎的研究」

① 科研費による研究成果

① 記述文法は、当該方言の継承にとって重要な役割を果たすが、これまでの琉球諸語の文法研究は、特定の文法項目に限定したものが多く、当該方言の全体記述を目指した研究は少なかった。基盤(A)の研究では**消滅危機言語としての琉球諸語の奄美大島から与那国島までの21地点の下位方言の文法**を統一した項目に従って記述した。

② 項目を統一することで他の下位方言の研究成果の参照が容易になり、**琉球諸語全体の比較研究の基盤が大きく改善された**。

③ 上記①②によって、特定の地域の下位方言についての知見しか有しなかった**若手研究者が琉球諸語全体を俯瞰しながら研究を進められるようになった**。

④ 文法は音韻に比べて体系的かつ保守的な性格を有し、日琉祖語の再建を含む歴史研究に大きな役割を有する。南琉球諸語は日琉諸語のなかで唯一音便がなく、南琉球諸語が文法的に最も古い要素を保持する可能性をもつ。**琉球諸語の文法研究は、日琉祖語の再建、日本語の言語系統樹研究に大きな役割を担うことを改めて確認できた**。

② 当初予想していなかった意外な展開

①研究に特化きた若手研究者が消滅危機言語としての琉球諸語の継承活動に目を向け一般の人を対象にした研究、活動に積極的に取り組むようになったことは、必ずしも想定していなかったが、これら若手研究が琉球諸語の継承活動にとって大きな力を役割を果たす。

② 基礎となる文法理論の異なる研究者が「消滅危機言語」「琉球諸語」という共通のフィールドで共同研究を行うことで予想以上の好効果を生み、琉球諸語研究の幅が広がった。

③ 大学院生、ポストドクの若手研究者を研究協力者として積極的に参加させたことによって、力のある若手研究者が増えたことと若手研究者の研究ネットワークが構築されたことは、今後の琉球諸語研究の進展に好材料である。

③ 今後期待される波及効果、社会への還元など

・音韻研究の面からの比較研究から、文法を対象にした比較研究の基礎ができたことによって、今後琉球諸語を研究しようと志す若手研究者への門戸を広げることができた。それと同時に、文法研究の成果は消滅危機方言としての琉球諸語の一般への継承に大きな役割を果たすことができるようになる。併せて、現在計画している琉球諸語および日琉諸語の歴史研究、言語系統樹研究の大きな柱ができた。